

森のいのちが、
未来をつくる。

森を守り、森に守られる。

天竜森林組合



JForest
天竜森林組合

〒431-3306 浜松市天竜区船明1951-1
TEL/053-926-2800 FAX/053-926-1000



天竜美林という宝

先人の想いを今に伝える、
二代木を育む森。

国土の3分の2を森林が占める日本は、世界でも有数の森林国です。中でも南アルプスの西南部に位置し、樹木の生育に適した自然環境にある天竜川水系の森林は、日本三大人工美林のひとつに数えられ、古くは江戸時代から代々人工造林が受け継がれてきました。天竜美林から伐り出される杉や松は国産針葉樹の中でも第一級の良材とされ、強い脂分は優れた耐久性と耐水性を備えるとともに、艶やかな木肌はカンナを掛けることで、より美しい光沢が生まれ、まるで宝石のような輝きを放ちます。長く蓄積されてきた造林技術により曲がりや節が少ない、目の詰まった木理は加工性に優れ、加工後の狂いが少ないのも天竜材の特長です。浜松市は国際的な森林認証制度であるFSC認証を早くから取得し、認証面積は日本最大^{※1}を誇ります。「治山治水」という言葉のとおり、森林は地域の環境や経済などの基盤を支えるかけがえのない宝です。二代木^{※2}に象徴される天竜美林は、先祖代々受け継がれてきた地域と、その未来への「想い」により育まれています。

※1 認証面積49,741ha（令和4年4月現在。市町村別取得面積として国内最大）
※2 二代木世代を超えて受け継がれる概ね樹齢100年以上の木。

山の仕事 育てる

木を植えることは、
次代に未来を託すこと。

木の寿命は長く、人の一生は短い。今を生きる私たちが植えた苗が伐期を迎える頃、私たちはおそらくこの世にはいません。ましてや伐られた木が人々の暮らしを支え、社会の基盤となり第二の寿命を全うするのはさらにその先となります。私たちの仕事は、山主さんが代々受け継がれてきた大切な財産を管理し、次の世代へと受け渡していくことです。天然林と異なり、一旦人の手が加わった人工林は、人が手入れしなければ、健全な森林を維持することができません。人の手が入らなくなった人工林は木々が密生し、地面に日光が届かなくなり、下草が育たず土壌が衰退し、雨水の涵養力がなくなり、災害時に地滑りが起こりやすくなるなど、山が荒廃してしまうことにつながります。木を植える、育てることは、次代の山主さんへ財産を受け渡すだけでなく、私たち自身の子どもたちや孫たちを守ることであり、彼らに未来を託すことでもあります。植えた苗がたくましく生長した姿を見ることができなくとも、私たちは未来を創造することができているのです。



山の仕事 伐る、つなげる



目の前にある木は誰がどんな想いで植えた木だろうか。きっと私たちと同じ想いで植えられたに違いない。ありません。生長した木に託された先人の想いを、私たちは伐り出すことで受け取ります。そして、生長した木は長い年月と自然の力、長く培われてきた造林技術により育まれたという物理的な現象が結実した姿にほかなりません。木を伐り出すことは、世代を超えて続けられてきた営為の総決算であり、関わった多くの人を代表して手を下すことを意味します。生命をいただくという自然の恵みに対する感謝の気持ちとともに、自然に対する畏敬の念を感じずにはいられません。その想いは次の工程へと託され、新たなサイクルへとリレーされていきます。



森の雫で、人の幸を

人々の暮らしと 深く結びついた森林の姿。

伐られた木は、その時点から木材としての新たな寿命を生きはじめます。木は育った時間と同じ時間を木材として生きる、もしくは、生きなければならぬといわれています。なぜなら、育った時間と同じ時間だけ使われなければ、次の木が育つ時間がなくなり、ゆくゆくは山から木が枯渇してしまうことになるからです。自然のサイクルに合わせることはできません。持続可能な社会を築くことなどできません。化石燃料が利用されるようになるまで、人々の暮らしは、その多くが森林資源によって支えられてきました。とくに森林国である日本では、建築をはじめ身の回りのあらゆるものが木でつくられ、燃料としても用いられてきました。森林と人々の暮らしは深く結びつき、里山の風景は日本の原風景となり、木は日本の文化そのものとなっていたわけです。人々は森の恵みに感謝するとともに、森に深い畏怖の念を抱いてきました。山は信仰の対象だったのです。山の恵みは、「森の雫」として人々にさまざまな幸をもたらしてきました。

森のいのちを 使い切る

山と街の持続可能な 木の循環を生み出す。

立木として森の中にあつた木が「森の雫」へと姿を変
えることは、いわば環境的・社会的価値としての役
割を終え、人々の暮らしの具として地域的・個人的
価値への転換を意味します。エネルギー革命により
化石資源への依存度が劇的に増え、森林資源の活用
は建築用途などの一部の用途に限られるようにな
り、建築分野でさえ安価な外材が用いられるようにな
ったため、森林国でありながら国産材の自給率は
低いままです。森林資源を建築用途だけに使ってい
たのではコストが合いません。間伐材はもちろん、
建築に使えない小径木、伐採木の枝や曲がった部分
など、これまで山で捨てられていた資源の有効活用
や、付加価値化を推進するなどしてコストを山に還
元する必要があります。森林の環境的・社会的価値
を維持するためには、地域的・個人的価値を拡大す
る、つまり、森林資源を使い尽くすしくみが不可欠
です。天竜美林の恵みを余すことなく流域の人々に
還元する。山と街の持続可能な木の循環を生み出す
ことこそ、森林国である日本の生きる道といえるの
ではないでしょうか。



かつて地域の山の木は、建築だけでなく、家具や建具、樽や桶、食器や道具など、さまざまな形に加工され、日常の暮らしの中に溶け込んでいました。個々の暮らしの中だけでなく、船や橋梁、側溝や電柱など、社会基盤を支えるインフラにも利用されてきました。木を基盤とした社会はゴミを出さず、CO₂も排出しない、まさに循環型社会でもあったわけです。新たな資源、優れた素材の開発により、私たちの暮らしはより豊かになりましたが、その一方で、失ったものの、犠牲にしてきたものも少なくありません。もともと加工が容易でエネルギーを使わない木は、人と親和性の高い素材でした。木でできるところには木を使う。天竜の森から生まれた命が人々の暮らしを支え、人々の命を守る。本当に豊かな暮らしとは、そのことを実感しながら生きることだと思います。



森の生命を、人の豊かさへ。



子どもたちが遊ぶ屋外の遊具にも天竜の「森の雫」が活かされている。



木に触れることで、木の優しさや温もりを知らず知らずのうちに身に付ける。



軽くて丈夫な木は、使い方次第でさまざまに活かせる。



木と石による護岸は人と環境にやさしい景観を生み出す。



道の駅に設置された間伐材のテーブルとベンチ。



3枚の無垢板をつないでつくられた重厚感ある座卓。



「木組み」でつくられた、木目の美しい針葉樹のパーテーション。



フォトフレーム、名刺入れ、団扇など、間伐材でつくられる小物。



毎年新作する人気の干支の置物。



無垢の針葉樹の素材感を活かしたシンプルなデザインのベンチ。